

古代日本語の船舶の名称における異文化の要素について

—天照を中心に—

黄 當 時

〔抄 録〕

古代日本語の船舶の名称やそれに由来する語彙には、日本語一視点のみでは正確に理解できないものがある。これらの単語には、適切な海の民の視点、具体的には、彼らが用いたであろう言語や文化についての知識を持てば正確に理解できるものがある。

茂在寅男氏は、『記』『紀』の中に古代ポリネシア語が多く混じっている、と述べ、井上夢間氏は、「枯野」等の言葉とカヌーとの関係について、ハワイ語を用いて簡潔に説明したが、その知見は、言語面からの研究に突破口を開くものであった。

小論では、「天照」は「天-照」の意味構造であること、「天」「照」はそれぞれポリネシア語の「ama」outrigger、「taurua」double canoeを漢字で書き記したものであり、両者を合わせた「天-照」(ama-taurua)は「アウトリガー・フロート付き双胴船」を意味すること、などを解明することができた。

古代の日本語の問題を考えたり、古典を読み解くのに、中国語やポリネシア語等の外国語の知識や、船舶・航海の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないか。

キーワード 天照、天鳥船/天鵠船/天磐船、天岩戸、天照大神坐舟、天足

1. はじめに

「播磨国風土記」(賀毛の郡)に次のような興味深い説話が見られる¹⁰¹⁾。

あかひの 猪養野。右、猪飼と号くるは、難波の高津の宮に御宇しめしし天皇のみ世に、日向の八肥人、一朝戸の君、天照す大神の坐せる舟に、猪を持ち参来て、進りて、飼ふべき所を四求ぎ申し仰ぎき。仍りて此処を賜りて、猪を放ち飼ひき。故れ、猪飼野と曰ふ。

植垣節也1997は「八九州球磨地方の人。西大寺本『金光明最勝王経』「肥」の白点のコマ

ヤカ・コマカの訓により、コマヒトと訓む説、球磨は肥の国なので「肥人」をクマヒトと訓む説がある。^{一九}『和名抄』肥後の国益城ましの郡に「麻部あき」。敷田年治は、上代は益城の辺まで日向といったと説く。『姓氏録』朝戸に「百済国の人。胸広使王むねひろのおみ朝戸あきの後あき也」。^{二〇}『大系』に「天照大神を奉祀した船。朝廷派遣の軍船か」。^{二一}『続紀大宝』元年正月「山於億良」（山上億良）は「於」を「上」に用いた例で、ウへと訓む説がある。この用法は漢籍に見出せない。『全書』の「恐らく、客語と補語との間に措く漢文の助字の用法に拠るのであろう。“舟に猪を”と訓む」という説に従う。^{二二}参上してくる。『景行紀』十二年九月「参来」の古訓、マウケリ。『仁徳記』歌謡に「来入り麻章久まきみれ」。^{二三}「求」は、請う。『穀梁伝』定公元年に、「求者、請也」。『神代紀』第十段、一書第二「求」の古訓、コハバ。『神武記』東征の段、歌謡に「肴な許波佐こはば」。「仰」を衍字とする説があるが、『雄略記』赤猪子の段の「大命おほみを仰ぎ待ちて」の「仰」と同じとする『大系』に従う」と語句に注を付し（pp. 113-114）、「猪養野。右について、猪飼と名づけたわけは、難波の高津の宮で天下をお治めになった天皇（仁徳天皇）のみ世に、日向の国の球磨の人、朝戸の君が、天照す大神のいらっしやる舟に、猪を持参して来て献上し、飼える所を賜わるようお願い出てお答えを待った。そこでここを賜って、猪を放し飼いにした。だから、猪飼野という」と口語訳している（pp. 113-114）。原文は、「猪養野。右、号猪飼者、難波高津宮御宇天皇之世、日向肥人、朝戸君、天照大神坐舟於、猪持参来進之、可飼所求申仰。仍所賜此處、而放飼猪。故曰猪飼野」（pp. 112-114）。

秋本吉郎1958は、同じ説話を次のように記述し、語句に注を付している¹⁰²）。

^{二六}猪養野 右、猪飼と號くるは、^{二七}難波の高津の宮に御宇しめしし天皇のみ世、^{二八}日向の肥人^{二九}朝戸君、天照大神の坐せる^{三〇}舟の於に、猪を持ち参来て、進たてまつりき。飼ふべき所を、^{三一}求もとぎ申し仰おほぎき。仍りて、此處を賜はりて、猪を放ち飼ひき。故、猪飼野といふ（pp. 343-345）。

^{二六}小野市の東南隅、草加野に擬している。^{二七}仁徳天皇。^{二八}九州の中西部（肥の国）を本居とした土着人。日向国（宮崎県）に居住していたので、日向の肥人という。^{二九}肥後国益城郡麻部郷（和名抄）を本居とした氏族名か。^{三〇}天照大神を奉祀した船。朝廷派遣の軍船か。^{三一}猪の飼育地を探し出してその下附をお願い出て、勅命を仰いだ（p. 343）。

原文表記：猪養野 右 號猪飼者 難波高津宮御宇天皇之世 日向肥人 朝戸君 天照大神坐舟於 猪持参来進之 可飼所 求申仰 仍所賜此處 而放飼猪 故曰猪飼野（p. 342）

原文の「天照大神坐舟於猪持参来進之」を、植垣節也1997は「天照す大神のいらっしやる舟

に、猪を持参して来て献上し」と口語訳し、秋本吉郎1958は訳をしていないが、同じように解釈しているのであろう。

「天照大神のいらっしゃる舟」とはどのような舟であろうか。

いずれの訳者も、天照に説明を加えないが、恐らく、字面の通り（漢字の表意機能が利用されて）天で照らしている、天を照らしている、という意味に理解しているのであろう。

この単語は、天で照らしている、天を照らしている、という理解でよいのであろうか。とんでもない大きな誤解である可能性はないのであろうか。

天での（照射）活動は、酸素の薄さと気温の低さの問題があり、それなりの装備がなければ実行できるものではない。また、地上からは距離がかなりあり、（照射）活動は、肉眼で見ることではできないため、如何なる装備であれ、それを観察し報告する者も同等の装備で見えるところまで行って帰って来なければならない。

では、天を照らしている、なら可能なのであろうか。

人間がいわゆる飛行機で空を飛んだのは、1903年12月17日に米国でライト兄弟が有人飛行をしたのが初めてであった。後に飛行機が戦争に使われるようになり、地上から攻撃するために、対空砲火が登場する。夜間は、敵機に狙いを定められなくともそれが通りそうな位置（経路）に弾を送り続けることもあるが（弾幕）、できるものなら狙いを定めたい。それまで陸上の物体を照射するのに用いられていたサーチライトが、夜間に飛来する航空機に向けて使われるようになったが、人間が天を照らす行為をしたのは、これが初めてであろう。

「天照」という情報をもたらした語部(集団)は、そのような意味（天で照らしている、天を照らしている、という意味）でこの情報を代々口伝したわけではなかろう。語部(集団)がもたらした音声情報を文字情報に変換した『古事記』『日本書紀』の聴取・記録担当者もそのような意味（天で照らしている、天を照らしている、という意味）でこの情報を書き記したわけではなかろう。

天で照らしている、天を照らしている、という意味ではなさそうだ、ということには、研究分野が文系であっても、学者・研究者自身で気付かねばならないし、気付くのが難しい場合でも、どうもおかしい、くらいの不審の念、違和感は抱きたいものである。

科捜研のドラマを茶の間で見る今日、私たちも、そろそろ解析手法を根本的に見直さねばならないのではないだろうか。

『日本国語大辞典』は、【天照——】を次のように説明している。

あまてら-・す【天照——】《連語》(動詞「あまてる(天照)」に尊敬の助動詞「す」の

付いた語)。「あまでらす」とも)「天照る」の尊敬語。

- ①天にあって照っていらっしゃる。天に輝いておられる。
- ②支配者として、天下にのぞんでおられる。天下に君臨しておられる。

『日本国語大辞典』①の説明、天にあって、や、天に、はいかにもマズイ。

②の説明もいかにもマズイ。どこで、を述べずに、「天下にのぞんでおられる。天下に君臨しておられる」と説明するが、原文には「天」とあるだけで「天下」とは書かれていない。「支配者として」の意味も原文にはない。余計なことを書いた可能性はないのであろうか。原文のどこにそのような意味があり、根拠があって訳しているのだろうか。

『広辞苑』の説明は、以下の通り。

あま-てら・す【天照らす】《自四》(古くはアマデラスとも)。

- ①「天照る」の尊敬語。天に輝いておられる。
- ②天下をお治めになる。

『大辞典』の説明は、以下の通り。

アマテラス 天照す 動四 天照るの敬語。

- ①天に照りわたり給ふ。空にかがやく。
- ②天下を知ろしめす。天下を治める。

辞書は、情報解析に必要である。ただ、残念なことに、難度が高い情報解析では、辞書は役に立たないばかりか、この推測はひどすぎる、ということに会うことも多くなる。そもそも、辞書を引いて直ぐに答えが見つかる問題は、このレベルの情報解析の対象ではない。情報解析では、辞書に記載があろうとなかろうと、想定外のないようにしなければならない。

諸氏が、この問題が容易に解けることはあるまい、と安心し、解析の努力を放棄した可能性はないのだろうか。情報解析では、解析ミスの可能性をなくすことが大切である。前人の諸説に従っただけのような「天照」の解釈は、解析ミスの可能性が高いままではないだろうか。

この人物には、天照大神、天照大御神、天照神、など肩書が複数あるが、紙幅の制約もあり、小論では、肩書は扱わない。

由来は、はっきりしないが、天照という言葉にはどのような情報が含まれているのであろうか。私たちは、自分が想像するほどいわゆる海の民のことを知らない可能性がある。海の経験の

乏しい私たちには、この問題について判断する能力や知識が欠けているかも知れないが、私たちの視点を、いわゆる海の民の視点にもう少しでも近づけることができさえすれば、解析対象を見極める能力や解析に必要な知識は、入手可能ではないだろうか。いわゆる海の民の視点とは、具体的には、彼らが用いたであろう言語や文化についての知識ということになる。小論では、管見に入った有用な知見を手掛かりに、必要にして十分な程度の知識を入手しつつ、言語学的視点から文字情報を丹念に解析することで、天照という言葉の由来を探り、付随する幾つかの問題の解釈も試みていきたい。

2. 先行研究

古代日本語における船舶の名称については、言語学的視点からの研究は貧弱で見るべきものがほとんどないが、二人の研究者が「枯野」解明の過程で示した知見が有用と思われるので、見ておきたい。

まず、茂在寅男氏は、人間は有史以前から驚くほどの広範囲にわたって航海や漂流によって移動していた、と考えている。その研究は、日本語の語彙にも及び、『記』『紀』の物語が成立した頃は、ある種の高速船を「カヌー」または「カノー」と呼んでいたもので、その当て字として「枯野」（『古事記』）、「枯野、軽野」（『日本書紀』）が使われたのではないかと推論している²⁰¹⁾。現在の「カヌー」という言葉は、コロンブスの航海以後にカリブ海の原住民から伝えられたアラワク語が元で、さらにその語源をたどると北太平洋環流に関係してくる、と言う。そして、『記』『紀』の中に古代ポリネシア語が多く混じっている、と述べ、様々な例を挙げるが、「枯野」については、具体的な手掛かりを示さなかった²⁰²⁾。その説は、重要な問題提起ではあったが、それ以上の知見が出てこなければ、面白い考えだ、で終わってしまうものであった。

次いで、井上夢間氏は²⁰³⁾、「枯野」等の言葉とカヌーとの関係について、種々の事例を紹介しつつ、基本的で重要なことがらを次のように簡潔に説明している²⁰⁴⁾。

私も大筋としては同じ考えですが、茂在氏がいささか乱暴にこれらの語を一括して同一語とされているのに対し、私はこれらはそれぞれ異なった語で、ポリネシア語の中のハワイ語によって解釈が可能であると考えています。

カヌーは、一般的にはハワイ語で「ワア、WAA」と呼ばれます（ハワイ語よりも古い時期に原ポリネシア語から分かれて変化したとされるサモア語では「ヴァ、VA'A」、ハワイ語よりも新しい時期に原ポリネシア語から分かれたが、その後変化が停止したと考えられるマオリ語では「ワカ、WAKA」）。しかし、カヌーをその種類によって区別する場合には、それぞれ呼び方が異なります。

ハワイ語で、一つのアウトリガーをもったカヌーを「カウカヒ、KAUKAHI」と呼び、

双胴のカタマラン型のカヌーを「カウルア、KAULUA」（マオリ語では、タウルア、TAURUA）と呼びます。ハワイ語の「カヒ、KAHI」は「一つ」の意味、「ルア、LUA」は「二つ」の意味、「カウ、KAU」は「そこに在る、組み込まれている、停泊している」といった意味で、マオリ語のこれに相当する「タウ、TAU」の語には、「キッチンとしている、美しい、恋人」といった意味が含まれていることからしますと、この語には「しっかりと作られた・可愛いやつ」といった語感があるのかも知れません。

これらのことからしますと、『古事記』等に出てくる「からの」または「からぬ」、
「かるの」は、ハワイ語の

「カウ・ラ・ヌイ」

KAU-LA-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; la = sail; nui = large)、
「大きな・帆をもつ・カヌー」

「カウルア・ヌイ」

KAULUA-NUI (kaulua = double canoe; nui = large)、
「大きな・双胴のカヌー」の意味と解することができます。

また、「かのう」は、ハワイ語の

「カウ・ヌイ」

KAU-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; nui = large)、
「大きな・カヌー」の意味と解することができます。

以上のように、記紀に出てくる言葉で日本語では合理的に解釈できない言葉が、ポリネシア語によって合理的に、実に正確に解釈することができるのです。

井上氏の解明は、言語学的視点からの研究に突破口を開くものであった。氏の画期的な知見により、私たちは、言語学的な根拠を持って古代日本語における船舶の名称について考察することができるようになったのである。氏の知見が私たちの研究の新たな礎となることは、間違いない。ここに引用した知見は、古代日本語における船舶の名称の解明にとって極めて重要な視点/手掛かりであり、今後の研究に大きく寄与することであろう。

3. 『万葉集』の船

寺川真知夫氏が『万葉集』の一部の船について、次のように簡潔にまとめているので³⁰¹⁾、井上氏の説くところを手掛かりにして、考察を加えておきたい。

……『万葉集』の巻二十に伊豆手夫禰（四三三六）、伊豆手乃船（四四六〇）と二例伊豆国産の船が詠まれており、奈良時代中期には大阪湾に回航され、使用されていたことが

知られる。その船は伊豆手船すなわち伊豆風の船と呼ばれているから、熊野船（巻十二、三一七二）、真熊野之船（巻六、九四四）、真熊野之小船（巻六、一〇三三）、安之我良乎夫禰（巻十四、三三六七）などと同じく、何らかの外見上の特徴を有する船であったに違いない。この四三三六の歌では「防人の堀江こぎつる伊豆手夫禰」とあるから、これを防人の輸送と解し得るなら、その特徴は大量輸送の可能な大型船ではなかったかと思われる。

以下、順を追って検討してみることにしよう。

先ず、（四三三六）と（四四六〇）の歌は、次の通りである。

卷第二十（四三三六）³⁰²⁾

防人の 堀江漕ぎ出る 伊豆手船 梶取る間なく 恋は繁けむ

卷第二十（四四六〇）³⁰³⁾

堀江漕ぐ 伊豆手の舟の 梶つくめ 音しば立ちぬ 水脈速みかも

異文化の語彙（外来語）を取り入れる場合、大きく分けて音訳と意識の二つの方法がある。

中国語では、いずれも漢字で表記するが、音訳し表記してみたもののこれではわかりにくい、と考えられる場合、さらに類名を加えて、全く未知でも少しは見当が付くようにすることがある。特に、音節数が少ないものは、よりわかりやすく安定したものにするために、この手法を採ることが多い。

例えば、beer や card という単語は、「啤 pí」や「卡 kǎ」と音訳され表記されるが、それだけで一つの独立した単語として使うとわかりにくい。そこで、類名の「酒 jiǔ」や「片 piàn」を加え、「啤酒 píjiǔ」や「卡片 kǎpiàn」とすることで、ある程度の見当は付くようにしておくのである。

「外来語+類名」という、現代中国語に見られるこのような表記法は、古代日本語にも見られる。「手」や「手乃」と音訳され表記されて、一応、事足りているものの、全く未知でも少しは見当が付くように、「夫禰」や「舟」という類名を加え、「手夫禰」や「手乃舟」としたのである。

歌人が見たものは、いずれも全称が「手乃」と呼ばれた船と考えることができる。表記の違いは、（四四六〇）では、全称の「手乃」をそのまま使うことができたが、（四三三六）では、音節数の制約により一音節少ない略称の「手」を用いた、ということから生じている。もちろん、逆に、（四三三六）で略称の「手」で詠まれた船は（四四六〇）では、音節数の制約を受けることなく「手」に「乃」を後置した全称の「手乃」で詠まれている、と見なしても一向に差し支えない。

いずれの見方をするにせよ、全称の「手乃」は二音節であり、一音節少ない略称にするには、前置要素「手」を略して後置要素「乃」を残すか、後置要素「乃」を略して前置要素「手」を残すか、の二つの選択肢しかない。実際には、後置要素「乃」は略せても（前置要素「手」が略称として残る）、前置要素「手」は略せない（後置要素「乃」が略称として残ることはない）。全称の「手乃」と略称の「手」は、修飾語を被修飾語の後に置くという、表層の日本語には見られない語法構造の存在を示している。

ありふれた言説であるが、言語は多重構造である。

例えば、女性の名前に、菊乃(野)、雪乃(野)、幸乃(野)、綾乃(野)、等がある。名付け親は、女の子に付けるのにふさわしい名前、というくらいの意識や知識しかなく、乃(野)を付さない、菊、雪、幸、綾、等との違いは、わからないであろう。このことは、学者、研究者でも同じで、乃(野)が何に由来しどのような意味があるのか、はわかっていない³⁰⁴⁾。

名詞に後置される乃(野)は、古代日本語とポリネシア語とのつながりを示す言語的痕跡で、nui に由来し、large、大きい、の意味である。これは、今日まで受け継がれ、心理の深層では過去の言語習慣（慣習）に基づく一種の「慣習法」が支配しているのではないか、と思わせる例である³⁰⁵⁾。

小島憲之、木下正俊、東野治之（1996）では、「手」の漢字に「て」のルビを振って「手^て」としているが、慎重な解析では、歌人が「手^た」と詠んでいた可能性を排除できない。「手」には、た行音の場合、「た」と「て」の二音があり、時代差や地域差、さらには個人差により、「た(ノ)フネ」を書き記すのに用いられたり「て(ノ)フネ」を書き記すのに用いられしたりしていた、と考えてよい。このケースでは、歌人が「た」と詠み「手」と書き記した可能性は、排除できるものではなく、むしろ高いのではないだろうか³⁰⁶⁾。

次は、(三一七二)、(九四四)、(一〇三三)の歌である。

卷第十二 (三一七二) ³⁰⁷⁾

浦廻漕ぐ 熊野船着き めづらしく かけて俣はぬ 月も日もなし

卷第六 (九四四) ³⁰⁸⁾

島隠り 我が漕ぎ来れば ともしかも 大和へ上る ま熊野の船

卷第六 (一〇三三) ³⁰⁹⁾

御食つ国 志摩の海人ならし ま熊野の 小船に乗りて 沖辺漕ぐ見ゆ

(一〇三三)の「真熊野之小船」は、(三一七二)の「熊野舟」や(九四四)の「真熊野之

船」とともに、ある同じタイプの舟/船を指している、と考えられる。つまり、(一〇三三)の「小船」は、「小」という情報を明示しており、(九四四)の「船」と(三一七二)の「舟」は、音節数の制約により「小」を略してはいるが、(一〇三三)の「小船」と同じもの、と理解してよい。

最後は、(三三六七)の歌である。

卷十四 (三三六七) ³¹⁰⁾

百つ島 足柄小舟 あるき多み 目こそ離るらめ 心は思へど

先の例と同じく、これらの単語も「異文化の語彙+類名」という表記法で書き記されている。「小」や「乎」と音訳され表記されて、一応、事足りているが、全く未知でも少しは見当が付くように、「船」や「夫祢」という類名を加えて、「小船」や「乎夫祢」としたのである。

小島憲之、木下正俊、東野治之 (1995a) では、「真熊野之小船」の「小」に「を」のルビを振って「小^を」とし、同1995bでは、「安之我良乎夫祢」の「乎」に「を」のルビを振って「乎^を」としているが、「小/乎」には、「を」と「こ」の二つの読みがある以上、その両方について検討すべきである。熊野の「小船」と足柄の「乎夫祢」は、ともに「こぶね」と詠まれたものを書き記した可能性もあるのである³¹¹⁾。

この文字表記から確実に言えることは、「小/乎」は「を」もしくは「こ」を書き記したということだけである。「小/乎」の訓みは「を」一音しかない、と考えるのは、思慮に欠けるが、「小/乎」は、考え得る訓みの一つであるのみならず、古代日本語における船舶の名称を研究する上で極めて重要な意味を持っている。学者であれ研究者であれ、古代日本語の中に「こぶね」(あるいは「こ」と呼ばれた船が存在した可能性がありそうだ、という認識を頭の片隅にそっと置くとよい。

漢字は、形音義の三要素からなるが、表意文字と分類されるように、表意機能が強い場合、漢字が理解できる者が、漢字の字形が示唆する意味を考慮せずに情報を解析することは、一般に、容易ではない。この問題もそうだが、漢字が表音に用いられている(ことを見抜かねばならない)ケースでも、字形が示唆する意味で解けた気分になれば、思考がそこで停止する。その結果、漢字表記が行われる以前の日本語の実相を見誤ることが間々生じるのである。

このケースでは、歌人は「小」や「乎」を表音に用いたのであり、表意に用いたのではないだろう。(三三六七)の原文のように、「乎夫祢」と表記されていれば、字面から舟/船の大きさを連想することはない。ところが、「小舟」と表記されていると、当て字に過ぎないということがわかっていけばよいが、つい、字形に引かれて、「サイズが小さい船」と取ってしまう。語感の極めて鋭い一部の人が腑に落ちないと思うことがあっても、漢字の絶大な表意力の前に、「小」と書いてあるから小さいと考えるしかない、と不審の思いを喪失してしまうのである。

それでは、「手」「手乃」と「小/乎」は、いずれも船を意味する外来語を音訳し、書き記したものの、ということになるが、一体どのような言葉に由来するのであろうか。先に引用した井上氏の知見から推測すれば、「手」は「tau」を、「手乃」は「tau-nui」あるいは「tauの助詞」³¹²⁾、そして、「小/乎」は「kau」を書き記したものであろう。

大型のカヌーと言いたければ、確かに、「手乃 (tau-nui)」が正確な表現である。しかし、実際には、寺川真知夫 (1980) が、大量輸送の可能な大型船ではなかったか、と推測するように (p.142)、(四三三六) の「手 (tau)」は (四四六〇) の「手乃 (tau-nui)」と同じ大型船を意味しており、大きいことを明言する場合を除き、「手 (tau)」だけでカヌー一般を指したはずである。それは、今日、カヌーという言葉が大小を問わずに使えるのと同じような状況である。このことは、「小/乎 (kau)」についても同様であった、と考えられる。

言語現象として、伊豆では「手、tau」が使われ、熊野や足柄では「小/乎、kau」が使われていることは、注目に値する。それは、伊豆にはカヌーを「手、tau」と呼ぶ人々が、そして、熊野や足柄にはカヌーを「小/乎、kau」と呼ぶ人々がいたことを示しているからである。

これで、古代日本語の船舶の名称には、後置修飾語の「nui、野/乃」を付す大型のもの (kaulua-nui、加良奴/加良怒/訶羅怒/枯野/軽野；kau-nui、狩野³¹³⁾；tau-nui、手乃³¹⁴⁾と、後置修飾語の「nui、野/乃」を付さず、大型のものから小型のものまで幅広く使用できるもの (tau、手；kau、小/乎) があったことがわかる。

外来語は、元の表記をそのまま採用しない限り、新たな表記をする際に揺れが生じやすい。日本語を例にとると、通信手段の発達した今日でさえ、全国的にレポートやリポートの揺れがある。関西でヘレと言う肉は、関東ではヒレと言うことが多いと聞く。また、一部のレストランでは、フィレとも言っている。

問題の性質がやや異なるが、最近の例では、金正日氏の三男の漢字表記の問題が挙げられる。金正恩氏は、当初、「金正雲」と表記されていたが、「雲」はハングル表記の読音と対応しないことがわかり、「銀」か「恩」であろうとされた。中国語では、一時 (2009年12月)、「金正恩」に変更し、その後は、「金正銀」と表記していた。この間、日本語では、漢字表記ではなく、「キム・ジョンウン」とカタカナ表記をしていたが、今は、漢字表記に戻している。なお、金正日氏も、一時期、金正一と表記されたことがあった。

あまのとりふね あまのはとふね あまのいわふね
4. 天鳥船、天鵠船、天磐船

『日本書紀』には、同じ構造で言及される船が三船ある。

『日本書紀』(神代下、第九段、一書第二)に「またお前が往来して海で遊ぶ備えのために、高橋・浮橋と天鳥船も造ろう」⁴⁰¹⁾とあり、小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利

正守 (1994) は、「天鳥船」に「ここでは水鳥の船。鳥は他界 (海は他界) と往来すると考えられていた」と頭注を付している (p. 135) ⁴⁰²。

この頭注は、「天」を解釈することなく、「天鳥」を「水鳥」と解釈しているようである。「海は他界」というのは、陸の民の発想であり、海の民のそれではない。そのような視点からでは、恐らく、正確な理解につながる解釈はできないのではないだろうか。

次に、『日本書紀』(神代下、第九段、正文)に「そこで熊野の諸手船に〔または天鶴船という〕、使者の稻背脛を乗せて遣わし、高皇産霊の勅を事代主神に伝達し、またその返事を尋ねさせた」⁴⁰³とあり、小島他 (1994) は、「天鶴船」に「天上を鳩のように早く飛ぶ意。「鶴」は享和本『新撰字鏡』に「也万波止」。記は天鳥船神を遣わす」と頭注を付している (p. 117) ⁴⁰⁴。

鳩 (在来種のヤマバト) は、鳥類の中でもさして速く飛ぶわけではない。渡来種のカワラバトを選別し、訓練を施した伝書鳩とは別種であり、飛行速度が速いという比喩に用いるのには、適当ではなかろう。海の民は、実際には、私たちにわからない何か重要な理由で鳩を用いていた可能性がある。解釈者諸氏に限らないが、古来、鳥類についての知識があまりないまま、字面との辻褃合わせ程度の解釈がなされてきたのではないだろうか。

さらに、『日本書紀』(神武天皇、即位前紀)に「すると、『東方に美しい国があります。四方を青山が囲んでいます。その中に、天磐船に乗って飛び降った者がおります』と言った」⁴⁰⁵とあり、小島他 (1994) は、「天磐船」に「天上界の磐のように堅固な船」と頭注を付している (p. 194) ⁴⁰⁶。

「天」を「天上界」と解釈しているが、この解釈で正しいのだろうか。磐船は、磐(の)船、という意味であり、磐(の)ように堅固な船、という意味ではなかろう。水に浮かばない岩石を、船の堅固さの比喩に用いるのは、第二例の、鳩が速く飛ぶ、以上の不自然さを覚えざるをえない。

以上のように、「天鳥船」、「天鶴船」、「天磐船」の「天」は、他界、天上(界)と解釈されている。天上(界)は、体積が相当大きい物体でなければ、地上からはその動きが視認できない空間であり、他界は、行けば同じ肉体では帰って来られないはずの空間である。これは、鳥も例外ではない。解釈者は、解釈対象が一体どういうものなのかが今一つよくわかっていないのではないだろうか。字面だけを頼りに解釈をしているということはないのであろうか。「天」には、他界や天上(界)以外に、この三船に共通するような意味はないのであろうか。

また、鳥を水鳥と解釈したのは、単に、船が直後にあるからで、具体的な水鳥を想定しているわけではなかろう。磐は、やや異質なものに見えるものの、鳥や鳩に共通する何らかの意味を持っている可能性もありそうだが、そのようなものはないのであろうか。

茂在寅男氏は、天について次のように述べている⁴⁰⁷。

……アマというのは、天、海の両方の意味にとれる、冠語的な形容詞であるといわれてきた。そして『日本書紀』の文脈のなかでは、それもいちおうはうなずける解釈であった。しかしこの場合、「天」という漢字からいったんひきはなして、AMAの発音だけで考えると、つぎのようなポリネシア語の意味が浮かびあがる。

アマ=カヌーのアウトリガーという腕木の先についている^{フロート}浮木。すなわちカヌーのアウトリガーについている縦方向の木。

AMA = Outrigger float; the longitudinal stick of the outrigger of a canoe.⁴⁰⁸⁾

アウトリガーのフロートというのは、カヌーの転覆をふせぐためにつけられた、かんたんな装置である。カヌー本体の横から何本かの細い腕木を出して、その先に、船型の浮木をつける。浮木の長さは、長いもので本体の八割にまで及ぶこともある。

なお「記紀」に「冠詞」として数多く出てくる天という言葉を、なぜこの場合だけアウトリガーと解するのか、という疑問も出るはずである。しかしカエルという言葉がゲコゲコ鳴く動物だけでなく、帰る、変える、の意味を持つこともある。どこの国の言葉にも、いくつか複数の意味をもつ同表音の単語、多義語が多数存在している。

この事情は現代も古代も、さほど変わりが無いであろう。さらにアマノイワフネの場合、とくに海または船に強く結びつく点で、AMA=アウトリガーの浮木説を採用しても無理ではないと思うのだが、いかがだろうか。

^{アマ}天については、茂在氏の推論が成立すると考えてよい。

漢字は、表意機能が極めて強いいため、私たちが、漢字の字形が示唆する意味を考慮せずに情報を解析することは、残念ながら、容易ではない。解析結果に不審の念を抱いても、漢字の意味から考えた解釈でいけるはずだ、と一旦思い込んでしまうと、不審の念はいつしか消え失せ、新たな切り口を見つけ、より正確な解析結果に辿り着くチャンスを失ってしまうのである。未知、或いはほとんど未知、の情報を解析する場合には、平常以上の慎重さが求められる。

このケースでも、私たちは、漢字は意味を示している、と考えてしまいがちであるが、この^{アマ}天は、例えば、天麩羅や天井^{テン}の天と同じく⁴⁰⁹⁾、アマという外来語の音声情報を書き記したものであり、^{あま}天(天空、sky)の意味はない。

次は、鳥、鳩、磐、である。この三者は同類の情報を伝えている可能性がありそうである。

鳥や鳩は、字面の通り、^{とり}鳥や^{はと}鳩と考えられる⁴¹⁰⁾。一方、「磐」は、現代日本語では鳥の意味を持たないが、鳥、鳩、磐、の三者が同類の情報を伝えているのであれば、「磐」は、イワという名称の鳥、ではないだろうか。

茂在氏は、磐について、次のように述べている⁴¹¹⁾。

しかし「イワ船」のイワを、文字どおり「岩・石・磐」の意に解釈するには、疑問が最後まで残る。岩の船は水に浮かばないからである。これらの言葉は「いい伝えられた言葉」を、単に文字に表現して記録したもの、つまり「当て字」と考えるべきなのではないだろうか。

したがって問題は、アマノイワフネという表音である。……イワという発音に、何か手がかりはないかどうか。とくにイワが何か船にかかわるとすれば、それが第一歩となるはずである。

私は、あるとすれば、黒潮によって移入した南方系の言語であると考えてきた。したがって、できるだけ古代に近い、古い南方系の諸語^{マヤ}属を、いちいちあためてみることにしたのである。

私は、……。

はじめのうちは自分の体験に照らして、東南アジアなどの古語を検索していった。しかし、アマノイワの表音で、船や海の意味にかかわる言葉はなかなかみつからない。ところが、マレー・ポリネシアン語族に入ったとたん、何か目からウロコが落ちるかのように、つぎつぎと適合する表記がみつかったのである。

マレー・ポリネシアン語族というのは、南太平洋地域に広く分布する言語である。アウストロネーシア語とも呼ばれ、ニュージーランド語やサモア語、ハワイ語などがふくまれるが、これをひっくりめてポリネシア語と呼んでおこう。地理的には、西はだいたいニューギニア、南はニュージーランド、東はイースター島、北はハワイ諸島という広大な地域である。

現代ハワイ語の辞書のなかに、古代ポリネシア語などの表音が併記されている一冊があった。そのあるページに、めざす言葉があった。イワ 'IWA がみつかったのである。そしてその意味は、軍艦鳥であった。

'IWA=Frigate or man-of-war bird.

イワ=軍艦鳥。これは単なる偶然だろうか。鳥はむかしから、航海に欠かせない動物であった。そのなかでもとくに軍艦鳥は、「航海の案内鳥」として、むかしからポリネシア人によって、南方で利用されていた鳥である。

この鳥は、巣を島の木の上に作る性質がある。朝早く島を飛び立って、夕刻に島へ帰り、昼の間は長時間海の上を飛びつづける性質をもっている。このため、朝夕の飛行方向から、島の存在を船乗りに知らせてくれるのである。主として熱帯の海に住み、カツオドリなどの海鳥から食物をまきあげる習性がある。黒色、翼が長く、片羽約五十センチ。全体としては日本の鵜によく似ている。

もしイワフネを「軍艦鳥の船」と解するならば、「軍艦鳥によって方向を定める船」の意味になるだろう。『古事記』のイワフネ、『日本書紀』のイワクスブネのイワは、こう考えると、きちんと船に符合する言葉である。

鳥をもちいた航海術は、古代から広く行なわれていた。日本においては、軍艦鳥の役割はカラスなどにかえられた。陸が見えないほど遠い沖に船が出てしまった場合、カラスなどを放してやって、それが飛んで行く方向、すなわち陸地の方向をみつけ出したのだと考えられている。

ここで問題となるのは、イワをハワイ語の‘IWAにそのままおきかえていいのかどうかである。かりにイワを「正確」にローマ字で表^{ママ}にするとすればIWAとなる。このIWAと‘IWAとは、完全に同じ発音ではないのである。

IWAの前に‘がついていても、日本語で書けばイワとしか書けないのだが、専門的にはこのイは声門閉鎖音がともなう「イ」である。これをさらに古代ポリネシア語にまでさかのぼると、KIWAつまりキワという発音になる。だから、イワフネではなくて、キワフネでなければならない、という議論が生ずるのであろう。

しかしキワがイワに変わったのは何世紀ごろか、また、たとえ「記紀」以前にキワだったとしても、当時の倭人にはイワとしか聞きとれなかったのではないか、などの問題提起をし……。

茂在氏は、問題提起、と控え目な表現をしているが、その推論は、言語面からの研究に突破口を開く画期的なものであった。ここに引用した知見は、古代日本語における船舶の名称の解明にとって極めて重要な手掛かりなのである。

こうして、天鳥船、天鶴船、天磐船、が「アウトリガー・フロートを付け、陸地や島の方向を確認するための鳥を舶載する船舶」という意味であることがわかった。

5. 天照大神が利用した舟

5-1. 神社の名称

松前健氏は、次のように述べている。(松前健1998)

『延喜式』神名帳をみると、畿内の諸処に^{あまてるみたまのかみ}天照御魂神もしくは^{あまてるかみ}天照神という霊格を祀る神社の名がみえる。大和国城下郡鏡^{かがつくりにますあまてるみたまのかみのやしろ}作^{おきだにます}坐天照御魂神社、同国城上郡他田坐天照御魂神社、山城国葛野郡木島^{このしまにます}坐天照御魂神社、摂津国嶋下郡新屋坐天照御魂神社がそれである。また山城国久世郡水主神社十座の中にも、水主坐天照御魂神一座が、同じく水主坐山背大^{みぬしの}国魂命神一座と並んで相嘗祭にあずかっていた。このほかに類似のアマテルを冠する神社

としては、丹波国天田郡天照玉命神社、播磨国揖保坐天照神社、対馬下県郡阿麻氏留神あまてる社あまてるなどがある。

社号の中には、地名から出ているものもあって、こうした「天照」を名とする神を祀りながらも、それが表面に出てこないものもあったらしい。山城国久世郡水度神社の祭神は、『山城国風土記』逸文によれば、天照高弥牟須比命あまてるたかみむすびのみことおよび和多都弥豊玉比売命わたつみとよたまひめのみことを祀っていた。また、『日本三代実録』をみると、天照真良建雄神、天照御門神、天照高日女神などという、アマテルを冠する神に、神階を授けている。これは式外である。(pp. 318-319)

伊勢皇大神宮の祭神は、記・紀に徴せられるように、明白に天照大神であって、かつて天照御魂神であったとか、この奉斎者が尾張氏であったという、はっきりした証拠は何もない。しかし、この伊勢大神でさえ、古くはアマテル神と呼ばれていたことは、神楽歌に「いかばかりよきわざしてかあま天てるやひるめの神をしばしとゞめむ」とあったり、皇大神宮鎮座の伊勢度会郡にある神路山の一名を天照山とか鶯日山とか、いっているのでもわかる。アマテラスは、アマテルに敬語をつけた形に他ならぬ。皇祖神であるための特別な言い方にすぎない。(p. 328)

松前氏の、アマテラスはアマテルに敬語をつけた形に他ならぬ、という解説は、天照はポリネシア語を書き記したのではないか、語尾のアマテラスのスは後から付加されたものではないか、という私たちの言語学的な推測を、神話学という異分野からも強化するものである。

5-2. 天照

天照大神という言い方は、利用していた船舶名を肩書に冠したものである。

私たちは、管見に入った有用な知見を手掛かりに、必要にして十分と考えられる程度の知識を入手してきたが、そろそろ言語学的視点から天照という言葉の由来を解析する力がついたのではないだろうか。

オーストロネシア語は、18世紀に布教で訪れた宣教師がローマ字表記法を開発するまで文字表記がなかった、とされているが、ある民族の古文献には、断片的ながらオーストロネシア語が記録されていたのである。

もうおわかりと思うが、後にローマ字で、ama-taurua、と表記されるようになったオーストロネシア語を、古代日本人は漢字で天照と書き記していたのである。天照大神の利用した船舶は、その名の通り、ama-taurua、アウトリガー付き双胴船、であった。

天照(ama-taurua)という情報は、アウトリガー付き双胴船の製造や操船に携わった人物であることを示唆しているが、それに大神等の肩書が付いた場合、その人物自身が船長であることはもちろん、はるかに上級の船団長、提督クラスの人物ではないか、と見て間違いのないの

ではないか。（他に、彦、という肩書を持つ人物もいる）

なお、天足の名を持つ人物は、天照の名を持つ人物と同じような職業を持つ（あるいは、そのような職業の家系に生まれた）人物であろう⁵²¹）。

5-3. 天岩戸

ここで、言語的考察が一部間違っているが、茂在氏が船材について述べた文章をもう一つ見せておきたい⁵³¹）。

……アマノイワフネとは、ポリネシア語的に解釈すれば、「アウトリガー付きカヌーの鳥船」ということになる。

かんたんに鳥船と書いてしまったが、前にも述べたように、むかしの航海術では鳥を切り離して考えられなかったらしい。福岡県の珍塚古墳の壁画には、船首に鳥がとまっていることや、「記紀」には数多くの「鳥船」の語が出てくるので、おいおい理解されるものと思う。

つぎに『古事記』の「鳥之磐楠船」についてである。『古事記』には、つぎのように出てくる。「鳥之石楠船神、またの名は天鳥船といふ」

天鳥船についてはつづいて述べるが、この「楠船」が問題である。私は現在の段階では、あとであげる各種言語の混交合成の例から、これを日本語の楠で造った船と考えている。ひとつには「楠」の字がそれ自体、「クスの木」という強い意味を指し示すこともあり、楠が船材に適していることもあって、右のように考えるしだいである。

したがってイワを「鳥」とポリネシア語義で解釈すれば、「楠製の鳥船」となる。ただしこのとき、正確にはトリノイワクスブネであるから、「トリの楠製の鳥船」となって、鳥が二重になってしまう。

このようなことは、……。

しかしここで、さらにもう一段深く掘りさげた考察も、できるのではないだろうか。私はトリという表音に注目したのである。

古代ポリネシア語で「トリ (TOLI)」というのは、現代ハワイ語では「コリ (KOLI)」に変化している。その意味は「木や蜜柑の皮をむく。木の表面を薄くけずって形を整える」という意味である。

この解釈でいくと、「トリノイワクスブネ」は「楠の表面をけずって形を整えた船」という翻訳も成り立つ。このかぎりでは少なくとも、「磐の船」とか「石の船」など、水に浮かべる実用船としてありえない解釈よりも、よほど現実性がある。

また、「磐のように堅い楠」などもありえないのである。楠の木には楠の木独特のやわらかさが、最後まで残っている。コクタンやリグナンバイタという木ならばともかく、あ

くまでも「磐のように堅い」の形容は、楠に関するかぎり不自然と考えるが、読者のご意見はどうであろうか。

こうなると、イワクスブネの別名「アマノトリフネ」は、「きをけずって造ったアウトリガー付きカヌー」となって、これもたいへんスムーズである。とくに無理のない解釈であらう。

茂在氏の言語的考察はどこが間違っているのか、おわかりになったであろうか。

氏が、鳥が二重になってしまう、と考えた個所において、「トリノ」は、「フネ」にかかっているのではなく、「イワ」にかかっている。表記をよく見ればきちんと見て取れることであるが、情報提供者は、明らかに、「トリノフネ」ではなく「トリノイワ」という情報を提供しようとしている。

茂在氏は、toli (koli. vt. To whittle, pare, sharpen, peel; to trim, as a lamp or the raveled edges of a dress; to shave, as hair)⁵³²⁾という単語に拘泥するあまり、「木や蜜柑の皮をむく。木の表面を薄くけずって形を整える」という意味を提示しつつ、トリノイワクスブネのトリを「楠の表面をけずって形を整えた」と解釈したり、アマノトリフネのトリを「きをけずって造った」と解釈してしまった。

私たちは、既に、天鳥船、天鶴船、天磐船、の三船の意味を解いている。天鳥船の鳥は、文字通り、鳥なのである。

茂在氏が、天鳥船の意味と他船の名称の意味とを整合的に捉えられなかったことは、惜しいことであるが、それ以上に惜まれるのは、「木の表面を薄く削る」程度では、よほど恰好な木材を見つけて来ない限り船は滅多に造れないこと位は承知のはずであるのに、その知識を検証に応用しなかったことである。茂在氏は、天鳥船は木を削って造るが、天鶴船や天磐船は木を削らずに造っている、とか、天鳥船にとって木を削ったことは重要だからわざわざ言及しているが、天鶴船や天磐船にとって木を削ったことは重要ではあるものの一々そのことに言及していないだけである、と考えているのであろうか。

「磐」は、適切な言語の知識がなければ、「磐」と誤解するのは必至であるが、実は、『記』『紀』の一部の単語には、そのような誤解を防ぐ工夫が凝らされているのである。「鳥之石楠船」、「鳥磐櫂船」⁵³³⁾という表記は、「石/磐」を石や岩の「石/磐」ではなく鳥の「石/磐」にどうあっても紛れなく理解してもらうために、普通はしない大サービスよろしく、冗長と承知の上で、「鳥之/鳥」という情報を、敢えて冠したものであるが、後人は、この明快なメッセージが理解できなかった。

「石/磐」は当面は大丈夫だがそのうちに誤解される日が来よう、と察し、語部(集団)に誤解を防ぐ工夫を凝らした文章を語り継がせた者(たち)は、只者ではない。

情報には、一般に、目で受容するもの（以下、視覚情報）と耳で受容するもの（以下、音声情報）の二種がある⁵³⁴。時空を越えた情報の伝達には、電話やテープレコーダ等がない時代にあっては、視覚情報を使うしかないが、視覚情報は、さらに、文字情報と非文字情報（画像や造形など）に大きく分けられ、文字がなかった頃は、非文字情報が利用された。

からこ かぎ
唐古・鍵遺跡（奈良県磯城郡田原本町）の弥生土器の線刻舟の前方には鳥が描かれている。
ひがしとのづか
東殿塚古墳（奈良県天理市）の円筒埴輪には、三隻の大型船の線刻画が描かれ、2号船は、
めづらしづか
舳先に鳥が描かれている。珍敷塚古墳（福岡県うきは市）の壁画には、舳先に鳥が大きく描かれている。

古代の日本において、一部の情報は、非文字情報と音声情報の二種の媒体で伝達されている。このケースで言えば、人々は鳥を船に乗せて航海した、という情報が、土器や壁画に彫られた非文字情報と、語部（集団）によって代々引き継がれ、後に『記』『紀』などの文字情報に変換された音声情報に共通して保存されているのである。

「天岩戸」は「天+岩+戸」の構造であること、ポリネシア語の「ama-iwa-tau」に相当すること、「天 ama アウトリガー+岩 iwa 鳥+戸 tau 船」の意味構造であること、全称は「鳥を船載する、アウトリガー・フロート付き外洋航海船」を意味すること、姉妹船に「天鳥船、天鶴船、天磐船⁵³⁵」があること、がおわかりいただけたであろう。

5-4. 天照大神坐舟

冒頭に引用した「播磨国風土記」の説話で、「日向の国の球磨の人、朝戸^{あさべ}の君が、天照す大神のいらっしゃる舟に、猪を持参して来て献上し」という解釈には不自然さがあった。

この不自然さは、説話の内容を丁寧に検討することで、確実になる。（原文は、日向肥人朝戸君天照大神坐舟於猪持参来進之）

原文の「天照大神坐舟於猪持参来進之」を、植垣節也1997は「天照す大神のいらっしゃる舟に、猪を持参して来て献上し」と口語訳し、秋本吉郎1958は訳をしていないが、同じように解釈しているのであろう。

「天照大神のいらっしゃる舟」とはどのような舟であろうか。

植垣節也1997は、正誤を検討することなく、『大系』にあることを根拠に、「天照大神坐舟」を「天照大神を奉祀した船。朝廷派遣の軍船か」としたが、『大系』の説明に瑕疵があるかどうか、は検討すらしていない可能性がありそうである。

九州地方からこの地に入るには瀬戸内海を東進し、加古川を遡り、さらにその支流である山田川を遡って現・山田町船付に到着したかも知れない。

記述内容を正しく理解できなかった原因の一つは、「坐」という文字情報を「奉祀」と解釈

したためである。そして、解釈者諸氏は、「坐」は「奉祀」、「持」は現場到着後の動作、と思ひ込み、陸路で来たはず、数匹しかいない猪を舟に持ち上げたはず、と情報提供者の意図（原文表記）と乖離のある解釈をし、「坐」「持（持参）」という文字情報を半ば無視した解釈がなされてきたからである。

「坐」は、語部（集団）なり一般人なりが提供した音声（+意味）情報を文字情報に変換したものである。情報の変換に当たっては、通常、高度な漢字の知識を持つ者が聴取・記録を担当している。

従って、語部（集団）なり一般人なりがこの説話の中で提供した音声（+意味）情報は、当然のことながら、「祀」ではない。なぜなら、仮に、語部（集団）なり一般人なりが提供した音声（+意味）情報が「祀」であったならば、聴取・記録担当者は、その情報を伝達するのに最も相応しい漢字（例えば、祭、祀）を用いて記録したことであろう。言い換えれば、語部（集団）が提供した音声（+意味）情報が「祭/祀」であったならば、「坐」という漢字が聴取・記録担当者の選択肢の中に存在する可能性は全くない、と考えてよい。この説話の聴取・記録担当者が「祭/祀」という音声（+意味）情報を「坐」という文字情報に変換することは、ありえない。この認識は、「天照大神坐舟」の解析に携る場合、頭の片隅にはっきりと入れておかねばならない。

漢字「坐」は、語部（集団）の提供した音声（+意味）情報を正確に文字情報に変換した表記である。私たちには、「坐」を「祭/祀」と訓む選択肢は全くないし、解析が可能かどうかという予想や判断にかかわりなく、「坐」は「坐」で解析せざるをえないのである。

情報は、ありふれたものである場合、語部（集団）に口伝されず、記録に残ることもない。この説話も例外ではなからう。

日向国に居住する肥人は（海路ではなく陸路で）数匹程度の猪を輸送し目的地で船に運び上げたのではなからう。日向国に居住する肥人は（海路で）天照大神の使用した船と同型の船を用いて甲板に溢れるほどの猪を積んできたのであろう。天照大神の使用した船と同型の船を用いて甲板に溢れるほどの猪を積んできたからこそ、語部（集団）に口伝するよう指示がなされ、記録に残ったのである。

諸氏は、前人の諸説を参照したであろうが、恐らく、それらを適切に処理する知識がなく、結果として、合理性や整合性を欠く解釈になったものと思われる。このことについて、諸氏は猛省する必要があるだろう。

「坐」に「祀」の意味はなく、「持」は出発時から手に持ち準備してある、の意であることは言を俟たない。

「天照す大神の舟に、猪を持参して来て献上し」は、「天照す大神の舟で猪を持参し、来たりて献上し」と切って読むべきであった。

「坐」に「奉祀」の意味はなく「奉祀」と言いたければ「祀」の字を知っていたはずだから

「祀」を使わずに「坐」を使ったのには何か意味がありそうだと考えなかったのは、情報解析としては、恣意的でバランスの取れない稚拙なものであった。

情報解析には、納得できない結果しか得られない場合でも自己の名誉欲や面子に構うことなく、解析不能、と判定できる者が望ましいことを示す事例であった。

では、「天照大神が乗っていた舟」とはどのような舟であろうか。

パソコンやマザコン、スマホやトクホ、マクドやミスド、が何を意味するのか、元はどのような単語だったのか、が理解できる者は、日本語の略称が今世紀や前世紀になってはじめて使用されるようになったのか、について考えるとよい。

『古今和歌集』406の天も、^{アマ}天鳥船、^{アマ}天鶴船、^{アマ}天磐船の「天」である。「ホットコーヒー」や「パトロールカー」の略称（それぞれ、ホットやパトカー）が示唆するように、日本語は、古今を問わず、省略表現を好む言語なのである。

古代において^{アマ}天鳥船、^{アマ}天鶴船、^{アマ}天磐船も略称の「天」が日常的に使われていたと見てよい。

「天の原」は、従来、（遠く離れた）大空、と解釈されてきた。しかし、実は、^{アマ}天鳥船、^{アマ}天鶴船、^{アマ}天磐船が水面一面に浮かんでいる、の意なのである。

5-5. 天足

「天」が^{アマ}天鳥船、^{アマ}天鶴船、^{アマ}天磐船の略称であるとわかれば、「天」が登場する幾つかの歌の真意もはっきりと見えよう。

歌が詠まれた頃、「天」が^{アマ}天鳥船、^{アマ}天鶴船、^{アマ}天磐船の略称の一つであることは常識であったが、この常識は、その後何か早い段階で急速に失われ、後人には、理解ができなくなってしまった。

『万葉集』147に次のような歌がある。

おほみみ やくき
 天皇聖躬¹不予^{みまし}し時に大^{おほきさき}后²の奉れる御歌一首
あま
 天の原³振り^ひ放^きげ⁴見れば大君の御寿は長く天足^{あまた}らしたり
あふみのすめらみこと
 一書に曰はく、近江天^{あふみのすめらみこと}皇¹の聖躰^{あまた}不予^{みまし}御病^{みまひには}急かなりし時に、大后^{たてまつ}の奉^{たてまつ}献^{たてまつ}れる御
 歌一首

中西進1978は、「1天子の病をいう。「予」は安・和。天智十年（六七一）九月不予、十月弥留（いよいよおも）く、十二月三日崩。2倭大后。3国原・海原の類。ハラは広がり。4目を遠くへやって。→一七。5「足る」の敬語。天皇を天・足ラシで讃えるのは当時の慣習。6底本「太」。金らによる。○平癒を祈る呪歌。以下大後の作は多く詞人の代作か」と語句に注を付し、「広々とした空を遠く見ると、大君の御命は長く天空に充足しているよ」と口語訳している（p. 123）。原文は、天原 振放見者 大王乃 御壽者長久 天足有。（同書同頁）

天空は、生命や魂魄が飛翔する空間ではあっても、生命や魂魄が充足する空間ではない。このことは、古代人も知っている。大后が空を遠く見たところで、大君の命が長く天空に充足しているのは見えなかったであろうし、大后はそのような意味でこの歌を詠んだのではなかろう。

何とも散漫で締まりのない口語訳は、歌に起因しているのではなく、歌（にある言葉）の意味がわからないまま、辻褄合わせ程度の訳をするしかなかったことに起因しているように見受けられるが、如何であろうか。

大後の歌の意味は、おおよそ次のようなものであろう。

眼下は^{アマ}天の原（水面一面の船）です。横の方を見ましたら（天足が停泊しているのが目に入り）大君にはいついつまでもお元気でいていただきたいと祈らずにはいられません。^{アマタラ}天足（ama-taurua、アウトリガー付き双胴船）が（ご乗船をお待ちして）停泊しているのですよ⁵⁵¹。

宣教師が太平洋諸語に文字表記を持ち込んでから、ローマ字で kaulua と表記されるようになった単語は、古代日本においては漢字一文字で、軽（時に、枯、唐）と書き記されていた（その二文字形式は、加良、加良、訶羅）。kaulua とは、船-二つ、双胴船、のことであり、軽、もちろん双胴船の意である。同様に、ローマ字で kaulua-nui と表記されるようになった単語は、古代日本では、漢字で、加良奴、加良怒、訶羅怒（二文字形式は、枯野、軽野）と書き記されていた。kaulua-nui とは、船-二つ-大きい、大型の双胴船、のことである（2. 先行研究参照）。

7. おわりに

冒頭で（1. はじめに）、私たちは、自分が想像するほどいわゆる海の民のことを知らない可能性がある、と述べたが、実際のところ、私たちは、無知とも言えるほどに海の民のことを知らない。

私たちを含め、後世の人々は、海の民の言語や文化についての知識を継承しなかったため、天照の意味を正確に取ることができない。適切な海の民の言語や文化についての知識を欠いたままでは、当然ながら、海の民の言語や文化を適切に理解したり説明することができないのである。

私たちは、新たに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識、という装備を持つことで、先人が持たなかった視点を持ち、先人が理解できなかったことが理解できるようになった。逆に言えば、仮に、私たちに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識（装備）がなければ、先人と似たようなこと、言い換えれば、第三者からは、牽強附会、と思われかねないようなことしか書けなかったものと思われる。今日の日本語の中に異文化の語彙（外来語）が存在する

ように、古代の日本語の中にも異文化の語彙（外来語）が存在することが、おわかりいただけたであろう。どの言語にも共通するが、日本語も、一層ではなく、多層なのである。海の民の言語や文化は、日本の言語や文化の基層の一部なのである。古代の日本社会には多様な言語や文化があったこと、即ち、古代の日本社会における言語や文化の多層性は、是非とも視野に入れておきたいものである。

海の民の視点、具体的には、海の民が用いたであろう言語や文化の知識を加えることで、古典の理解や解釈が、より豊かに、より正確になる。私たちは、古代の日本語に取り組むのに、いわゆる日本語の知識にせいぜい中国語や朝鮮語の知識を加えただけのような姿勢でやってきたが、ポリネシア語が解析/研究上考慮すべき言語であることを否定できないことがよりはっきりしたのである。学者や研究者は、政治家ではないのだから、外来語は想定外だった、と恣意的に無責任なことを言うのは、やめておきたいものである。

小論では、先達の知見を手掛かりに、さらに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識を入手することで、私たちの視点を海の民の視点に少しでも近づけ、「天照」は「^{あまてる}天-^{テル}照」の意味構造であること、「^{アマ}天」はポリネシア語の「ama」を漢字で書き記したもので「アウトリガー・フロート」を意味し、「^{テル}照」は、ポリネシア語の「taurua」を漢字で書き記したもので「^{アマ}双胴船」を意味すること、両者を合わせた「^{アマ}天-^{テル}照」（ama-taurua）は、「アウトリガー・フロート付き双胴船」を意味すること、などを説明することができた。

小論は、これまで持つことのなかった、異文化の語彙（外来語）という視点を加えることで幾つかの問題を解くことができた。古代の日本語の問題をより正確に解いたり、古典をより正確に理解するのに、外国語、特にポリネシア語等の周辺諸語の知識や、船舶・航海の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないか。

〔注〕

101) 植垣節也1997。『新編 日本古典文学全集 5 風土記』小学館。

102) 秋本吉郎1958。『風土記』岩波書店。

201) 茂在寅男1984。p. 32。

202) 「枯野」等の解釈に外来語（異文化の語彙）という観点を試みたのは、茂在氏が初めてであろう。

203) 筆名。本名、政行。

204) これは、管見に入った最も有用な知見である。井上氏は、ここでは慎重に、kau = to place, to set, rest = canoeと説明しているが、自身のHP（夢間草廬、<http://www.iris.dti.ne.jp/~muken/>）では、kau = canoeとしている。Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986には、「kauahi. n. Canoe with a single outrigger float」(p. 135)、「kaulua. nvi. Double canoe」(p. 137)の例があるので、kauをcanoeと理解するのに問題はない。

修飾語がなくとも、「kau」だけで使われていたであろう。

引用文は、KAMAKURA OUTRIGGER CLUB、<http://leiland.com/outrigger/column.shtml?kodai.html>。Copyright (C) 1999-2002 KAMAKURA OUTRIGGER CLUB & LEILAND INC.に掲載されていたが、今は削除されている。

- 301) 寺川真知夫1980. pp. 141-142. 引用の際の省略箇所は、……、で示す。以下同じ。
- 302) 小島憲之、木下正俊、東野治之 (1996) p. 390は、次のように注をする。
伊豆手船—伊豆地方で建造された船をいうか。四四六〇の「伊豆手の舟」との異同は不明。
『令集解』(宮繕令・古記)に船艇の代表に『播磨国風土記』逸文に見える伝説的丸木舟の名「速鳥」と並べて「難波伊豆の類」とも見える。
寺川 (1980) p. 142は、引用の通り、大型船か、と推測する。正しい推測である。
原文：佐吉母利能 保理江己芸豆流 伊豆手夫祢 加治登流間奈久 恋波思気家牟。
右、九日大伴宿祢家持作之。(同書同頁。黒丸、白丸などのルビは筆者。以下同じ)
- 303) 小島他 (1996) p. 437は、次のように頭注を付している。
伊豆手の舟→四三三六 (伊豆手船)。歌の趣から推して、伊豆手船よりも小型かと思われる。
原文：保利江己具 伊豆手乃舟乃 可治都久米 於等之婆多知奴 美乎波也美可母。(同書同頁)
小島、木下、東野諸氏は、窮余の策をとったのであろうが、歌の趣に頼る推測は、信頼性に疑問が残り、後日、正誤の判断が示されるまでは、理論上、誤りではないものの、研究方法として許容されない。後述するが、文字表記に基づくなら、「手乃」は「手」よりも大きいので、小島、木下、東野諸氏は、逆に解釈をしてしまっている。
趣は、個々人で異なるものであり、趣ではなく、言語に依拠することが望ましい。日本語一視点で解こうとする思考に傾きがちな研究者の意識改革が待たれる。
- 304) 小島、木下、東野諸氏は、一文字多い/少ない、一音節多い/少ない、という程度の説明に満足せず、果敢にも、歌の趣から、手乃を手よりも小型か、と誤った推測をしたが (注303参照)、これでは、恐らく、小島、木下、東野諸氏は、例えば、菊は普通(サイズ)の菊で、菊乃は大輪の菊という意味の違いや、幸は普通(程度)の幸せで、幸乃は大きな幸せという意味の違いもわからないのではないだろうか。乃は、いわゆる海の民の言語や文化についての知識がなければ、正しく理解できないが、私たちは、今後「手と手乃」の大小や「菊と菊乃」の違いを論じるのに、趣に頼る必要はもはやない。
- 305) 菊や雪には「小」が付されたものがあるが、幸や綾にはそれが無い。
小菊 — 小雪 — φφ — φφ
菊乃 — 雪乃 — 幸乃 — 綾乃
この言語現象は、幸や綾は大きい方を求めるという人間の性さがを示してくれているとともに、前置修飾言語集団は、小さいもの、目立たないものが好みではないか、後置修飾言語集団は、大きいもの、目立つものが好みではないか、今日見る状況は、(出自を異にする)両集団が長い年月の間に混淆した結果ではないか、という点にも気付かせてくれる。
そして、色彩の例はないが、空想が許されるなら、前置修飾言語集団は、長年、中間色が多い環境で、それを見、それを好むのに対し、後置修飾言語集団は、長年、原色が多い環境で、それを見、それを好むのではないか、とも考えられる。
- 306) 『日本書紀』(巻第二、神代下、第九段、正文)に、「熊野の諸手船」という船がある。
「諸手船」の「手」は、『万葉集』の「手夫祢/手乃舟」の「手」と同じもので、手 (tau) という名の船であり、「船」は、『万葉集』の「手夫祢/手乃舟」の「夫祢/舟」と同じもので、理解を助けるための類名である。tau(舟/船)という情報を、伊豆の知識人(たち)は、手、という漢字で書き記し、島根の知識人(たち)も、同様に、手、という漢字で書き記した、と見てよい。
- 307) 小島憲之、木下正俊、東野治之 (1995b) p. 369は、次のように注を付している。
浦廻漕ぐ—津々浦々を漕ぎ巡る、の意で、熊野船の特性を述べた修飾語。
熊野船着き—熊野船は熊野地方産の原木で製した船。その構造や機能に特色があった上に、その沿岸住民も航海技術に長じていたことで、当時、既に有名であったのであろう。巻第六の山部赤人の歌(九四四)にも「大和へ上るま熊野の船」が詠まれている。
原文：浦廻榜 熊野舟附 日頼志久 懸不思 月毛日毛無。(同書同頁)

- 青木生子、井手至、伊藤博、清水克彦、橋本四郎 (1980) p. 390は、次のように注釈を付している。
- 熊野舟つき「熊野舟」は良材を産する紀伊の熊野地方の舟で、特異な形状であつたらしい。「つき」は形状の意で、目つき・顔つきの「つき」と同じものか。上二句は序。「めづらしく」を起す。
- 308) 小島憲之、木下正俊、東野治之 (1995a) pp. 121-122は、次のように注釈を付している。
- 島隠り—この島隠ルは風待ちなどのために島陰に停泊すること。
ま熊野の船—マは接頭語。熊野は熊野船 (三一七二) としてその構造・機能に特色がある船を産し、沿岸住民も航海技術が卓越していたことで、当時既に有名であった。
原文：嶋隠 吾棹来者 乏毳 倭辺上 真熊野之船。(同書 p. 121)
- 309) 小島他 (1995a) p. 162の注。
- ま熊野の小船→九四四 (ま熊野の船)。
原文：御食国 志麻乃海部有之 真熊野之 小船尔乘而 奥部榜所見。(同書同頁)
なお、「小」の字に「を」のルビをわざわざ振るからには、そのように読ませようという意図があるものと思うが、「小石」や「小島」の「こ」に読む可能性は、検討されたのであろうか。
- 310) 小島他 (1995b) p. 464の注。
- 足柄小舟—足柄山で造った舟。「足柄山に船木伐り」(三九一) ともあった。逸文『相模国風土記』に、足柄山の杉材で造った舟は足が軽い、とある。
原文：母毛豆思麻 安之我良乎夫祢 安流吉於保美 目許曾可流良米 己許呂波毛杼。(同書同頁)
- 311) 「小船」が後人に正しく理解されていないことを知るには、「小船」とはどのような船なのか、つまり、その具体的な大きさや乗員数等を考えるとよい。注303) で、歌の趣に頼る推測は、信頼性に疑問が残り、後日、正誤の判断が示されるまでは、理論上、誤りではないものの、研究方法として許容されない、とは書いたが、歌や文章の趣が真にわかる人には、字面は「小船」だが実際には「小」さくなかろう、と感じられることがあるのではないか。
- 312) nui という音声情報は、元々、奴/怒と表記され (ヌと訓まれ) たが、その後、原音を耳にする機会がなくなり、ヌは既にノに劣化していたのではないか。意味についても、単語全体あるいは単語の一部 (単独のヌもしくはノ) とで、時代差や地域差、さらには個人差により、理解度に差があったものと思われる。ヌを書き記すのに、野、ノを書き記すのに、野もしくは乃、が使われたのではないか。
- 313) 「kau-nui (狩野)」は、広く使われていたようである。その痕跡は、船名にはないようであるが、地名に見ることができる。狩野は、茂在氏の挙げる例であるが (茂在寅男1984.p. 20)、他にも、例えば、巨野郡 (鳥取県)、金浦 (秋田県由利郡) がある。「kau-nui」との深いつながりで名付けられたものであろう。
- 広島県福山市金江町は、江に金(属)があることに由来するのではなく、江に kau-nui (船-大きい) があることに由来していよう。金江町金見、金江町藁江、も、金(属)が見えるのではなく kau-nui (大型船) が見えることに由来したものであり、江に(稲/麦)藁が浮かんでいるのではなく、江に waa-lua (双胴船) が浮かんでいることに由来したものであろう。
- 山口県東部にある鹿野町は、鹿がいる野原、という特色から地名ができた可能性もあろうが、錦川上流にあり、農林業を主に行っていることから見ると、kau-nui (船-大きい) 用の木材を産することに由来して地名ができた可能性もあろう。
- 人名の狩野 (かの、かのう)、加納、加能、嘉納、叶などにも kau-nui に由来するケースがあるう。
- 314) 地名にも、その痕跡がある。例えば、田浦 (長崎県福江市) は、浦(の近く)に田圃があるのでなく、浦(そのもの)に tau-nui (大型船、もしくは、tau、船) が見られたことに由来する地名であらう。

また、人名の田野にも tau-nui (の製造や操船に携わったこと) に由来するケースがあろう。
このような事例は、今後さらに追及するならば、無数に発見しうるに相違ない。

- 401) 小島他 (1994) の口語訳 (p. 135)。
402) 『日本国語大辞典』は、「天鳥船」を「(「天の」は美称) 鳥が飛ぶように速く走る船。あめの鳥船」と説明している (第一巻 p. 543)。
403) 小島他 (1994) の口語訳 (pp. 117-118)。
404) 『日本国語大辞典』は、「天鶴船」を「天鳩船」と表記し、「(鳩のように速く走る船の意) 「熊野の諸手船」の別名とされている船の名」と説明している (第一巻 p. 544)。
405) 小島他 (1994) の口語訳 (p. 195)。
406) 『日本国語大辞典』は、「天磐船」を「(「磐 (いわ)」は「堅固な」の意) ①空中を飛行する堅固な船。「日本書紀」では、高天原から下界に降りる際に用いた船として伝えている。あめのいわふね」と説明している (第一巻 p. 541)。
407) 茂在寅男1981. pp. 60-62。
408) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986は、ama. n. Outrigger float; port hull of a double canoe, so called because it replaces the float、とする (p. 22)。
409) 語源は、諸説あり、『広辞苑』第五版は「【tēmporas ^{ポルト}・天麩羅】、(斎時の意。tempero (調味料) からともいう)」とする。天麩羅は、天婦羅とも書かれる。外来語は、元の表記をそのまま採用しない限り、新たな表記をする際に揺れが生じやすいが、その一例である。
410) 鳩は、ハトの総称と理解してもよく、「亀鳩」の略称と理解してもよい。
411) 茂在寅男1981. pp. 56-59。
521) 淤母陀琉/面足は、天照や天足と表記 (音声情報から変換された文字情報) に乖離が見られるが、時代や地域の差、さらには口伝した語部(集団)の差によって乖離が生じたものと見て、同様に考えてよいのではないか。
531) 茂在寅男1981. pp. 62-64。
532) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. p. 163。
533) それぞれ、『古事記』(上巻)、『日本書紀』(神代上、第五段、一書第二)。
534) 触覚情報に、アン・サリバンがヘレン・ケラーの手に字を書いたことや点字がある。
535) 天岩戸と天磐船の違いは、例えば、グレープやアップルとブドウやリンゴの違いのようなものであり、言葉は違いますが意味に違いはない。
551) 天足は、普通名詞であるが、天皇の使用した天足は、敬意を持って、大御船、とも呼ばれた(『万葉集』151)。恐らく、旗艦 (flagship) であろう。

[参考文献]

<日文>

- 荻原浅男、鴻巣隼男1973。『古事記 上代歌謡 (日本古典文学全集1)』小学館。
小沢正夫1971。『古今和歌集 (日本古典文学全集7)』小学館。
角川日本地名大辞典 編纂委員会1990。『角川日本地名大辞典』角川書店。
『広辞苑』1998 (第五版。1955第一版)。岩波書店。
小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994。『日本書紀① (新編 日本古典文学全集2)』小学館。
小島憲之、木下正俊、東野治之1995a。『萬葉集② (新編 日本古典文学全集7)』小学館。
小島憲之、木下正俊、東野治之1995b。『萬葉集③ (新編 日本古典文学全集8)』小学館。
小島憲之、木下正俊、東野治之1996。『萬葉集④ (新編 日本古典文学全集9)』小学館。
『大辞典』1994 (覆刻版。1936初版)。平凡社。
寺川真知夫1980。「『仁徳記』の枯野伝承の形成」、土橋寛先生古稀記念論文集刊行会編『日本古代論集』笠間書院。

- 中西進1978。『万葉集 全訳注原文付（一）』講談社。
中西進1980。『万葉集 全訳注原文付（二）』講談社。
中西進1981。『万葉集 全訳注原文付（三）』講談社。
中西進1983。『万葉集 全訳注原文付（四）』講談社。
中村啓信2015。『風土記』上・下、中村啓信監修・訳注、角川ソフィア文庫。
日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部2000、2001。『日本国語大辞典』（第二版 第一巻、第十一巻）小学館。
松前健1998。『松前健著作集 第9巻 日本神話論Ⅰ』おうふう。
茂在寅男1981。『日本語大漂流 航海術が解明した古事記の謎』光文社。
茂在寅男1984。『歴史を運んだ船——神話・伝説の実証』東海大学出版会。
山口佳紀、神野志隆光1997。『新編 日本古典文学全集 1 古事記』小学館。
山口佳紀、神野志隆光1997。『古事記（新編 日本古典文学全集1）』小学館。

〈その他〉

- A. W. Reed & Timoti Kāretu, Ross Calman 2001. *The Reed Concise Māori DICTIONARY*,
Literary Productions Ltd.
Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. *Hawaiian Dictionary*, University of Hawaii Press.

[付記] 本稿は、平成29年度佛教大学特別研究奨励費の助成による研究成果の一部である。

（こう とうじ 中国学科）

2017年11月15日受理